

(二頁続き) いないと思える対応もなされてきました。このような過去に学び、時代の常識を無批判に受け入れることがないよう、また苦渋の選択が必要になる社会が再び到来しないよう、注意深く見極めていく必要があります。

宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁ある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご縁のない方々に対して、いかにほたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。

また、現代のさまざまな問題にどのように取り組むのか、とりわけ、東日本大震災をはじめとする多くの被災地の復興をどのように支援していくのかなど、問題は山積しています。

「自信教人信」のお言葉をいただき、現代の苦悩とともに背負い、御同朋の社会をめざして皆さまと歩んでまいりたいと思います。

二〇一四年 六月六日
平成二十六年

龍谷門主 釋專如



退任に際しての消息

本日、平成二十六年六月五日をもって、私は本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主を退任し、後を本願寺嗣法・新門に託すことにいたしました。

昭和五十二年四月一日、法統を継承して以来、三十七年二か月になります。至らぬことが多々あった中、今日まで務めることができたのは、仏祖のご加護は申すまでもなく、宗門内外の方々のご支援、ご理解とご協力のおかげであります。皆様に、心より感謝申し上げます。

この間、本願寺では、阿弥陀堂の修復、顕如上人四百回忌、蓮如上人五百回忌、御影堂の修復、宗祖聖人七百五十回大遠忌等のご縁を皆さまとともにすることができました。さらに、北境内地を取得できたお蔭で、活動をより広く展開できるようになりました。また、宗門では基幹運動の推進とともに、さまざまな活動や事業がありました。世界各地にも、お念仏の輪が広がっています。それらを巡教などによって身近に知り、御同朋の思いを確かめることができましたこと、まことに有り難く思います。

この三十七年間は勝如前門主の戦争を挟んだ激変の五十年に比べれば、やや穏やかとも言える時代でしたが、国内では大小の天災・人災が相次ぎ、経済格差、気候変動、核物質の拡散など、深刻なあるいは人類生存にかかわる課題が露わになりました。その中で、心残りは、浄土真宗に生きる私たちが十分に力を発揮できたとは言えないことです。(次頁へ)

